

ウドの栽培と施肥

神奈川県横浜農業改良普及所

大崎 彦治

はじめに

ウドは日本の気候風土に適しているためか、どこにも見られる作物であるが、まとまった生産地という大都市周辺に多い。東京では東京都下と神奈川県、大阪では大阪府下、名古屋では愛知県下と三重県というように大消費都市に直結している。なかでも東京都周辺の生産量は全国の約80%を占めている。

これはウドの栽培が1年1作であることから考えると大変不思議に思えるが、それはそれなりに経営上成り立っているから今日まで続いている訳で、また発展しようともしているのである。

横浜市におけるウド栽培は、昭和30年頃東京都下の栽培技術が伝わって導入されたものである。したがって歴史は浅いが、栽培技術の統一と軟化室の共同施設および根株の冷蔵施設を完備して、きわめて品質の優秀なものを周年計画的に出荷しているのです。市場側からも、各生産地からも注目されている。

栽培の概要

1. 種株の選び方

ウドの軟化栽培で成績があがるかあがらないかは、根株の良否で決定してしまう。その根株を養成する最初の技術は種株を選ぶことから始まる。

前年養成した根株の中から芽の形、大きさ、充実度、着色、さらに根群の状態を見て生産力のある系統を選ぶ。これは掘りあげた畑に根株を並べて行なうのであるが、この時に粗雑な選び方をすると系統がみだれるばかりでなく、根株が不揃いになって結局は軟化室に伏せ込んでから品質が揃わず軟化率を下げる。

単純な作業のようであるが、この選び方によって年々良い成績をあげる農家と、悪

くなる農家があるので、ある意味ではウド栽培の成功を左右する技術といってよい。

種株の生産面積は普通1株から3~4芽に分割できるので、栽培面積の3/4を準備する。

2. 植え付け時期と株間

植え付け時期は気温との関係から、その地方により適期があるので、その時期を失なわないようにすることはいうまでもないが、かならずしも早く植え付けることがよいとはいえない。ある程度地温があがり気候の定まった4月上旬頃でよい。

種株をそのまま定植すると欠株ができ、また生育も不揃いになるので一度仮伏せして催芽し、本葉1~2枚に開いた時点で植え付けると病害も発見できるので、畑全体が揃って生育をする。

栽植距離は従来は、畦巾65cm、株間45cmで10a当り2,400株であったが、現在は根株の掘りあげに大型トラクターを利用する関係から95cm、54cmで1,800株の栽植距離にしている。以前に比較すると10aで600株の減少であるが、根株の充実が良くなっているため約2,000kgの収量をあげることができ、かえって増収になっている。

3. 施肥量

ウドに関する肥料試験は、あまり行なわれていないので、栽培農家の成績を基準にして施肥設計を立てている例が多い。これはウドは粗放な作物なので、簡単に考えられていたことも事実であるが、実際に試験を行なうとなると栽培上の根株収量だけでなく、軟化上の収量も検討しなければならぬので、軟化室をもたないと試験ができないことも原因している。

さきに当所では、農家の協力を得て三要素の肥料試験を行なったが、その結果は表1のような成績であった。これはCDU化成(15・15・15)を使用し全量元肥施用で追肥は施用しなかったが、20kg施用区が最も良い成績になっている。その後CDU化成を始め各種緩効性肥料の全面散布施用も試験をしているが、共に20~25kg施用区が良い

第1表 ウドの施肥量試験 (昭46)(火山灰土)

N成分 肥料区	1株当り根株 重 量 (80株平均)	ウドの軟化生産量 (80株当り)								
		本 数				重 量				
		L	L	M	計	L	L	M	計	比率
30kg施用区	972 g	72本	61本	8本	141本	46.0kg	19.0kg	1.8kg	66.8kg	92.6
20kg施用区	1,133 g	129	34	10	171	59.4	10.7	2.0	72.1	100.0
10kg施用区	942 g	71	25	19	115	44.2	7.8	4.5	56.5	78.4

成績を示している。

これらの試験結果を基にして、標準施肥量はN 22.5kg, P 30kg, K 20kgとして、省力化を計るため、株間施肥をやめて緩効性肥料の元肥全面施用をすすめている。

4. 管理と労力

植え付け後の管理はきわめて粗放で、5～6月に2回程度、管理機によって中耕・除草を行えば十分である。その後は茎葉が繁茂するので除草の必要はない。

病害虫はネマトーダに弱いので、土壌消毒をしなければならぬが、そのほかはほとんど心配はない。

第2表 10a 当り所要労力

作業名	月	1	3	4	5	6	12	計
植え付準備			2.00	2.00				4.00
植え付け				14.00				14.00
除草中耕					4.00	4.00		8.00
掘りあげ	14.00						3.00	17.00
伏せ込み準備	8.00							8.00
伏せ込み	16.00							16.00
軟化室の管理	5.00							5.00
収穫調整			40.00					40.00
出荷、その他			8.00					8.00
計		43.00	50.00	16.00	4.00	4.00	3.00	120.00

労力は以前に比較すると大変省力化され、特に大型トラクターの導入により根株掘りあげの労力の減少と、軟化室の共同施設による収穫、調整労力の減少は、他の生産地より約30%も少なくなっている。10a 当りの所要労力は2表のとおりで、全体で120時間程度である。なお根株養成だけをみると、わずかに43時間である。

このように粗放野菜であることが、根株養成と軟化栽培を分業化することも容易であり、都市近郊で成立する要因になっている。

イ. 軟化室の共同施設

軟化室は一般にムロと呼んでおり、地形の関係から縦穴式が多い。このため根株の伏せ込み作業と軟化ウドの収穫、調整は大変な重労働で頭痛のたねである。ウド栽培を経営的に安定化するためには、この問題を解決しなければ発展しない。このため横浜市のウド栽培農家は昭和43年に3,000万円余の巨費を投じて横穴・地下方式の共同軟化施設を完成した。

この施設は地下5mの常温層に中央道を掘り、その左右に幹線通路3.5mを11本設け、その両側に14m²の軟化室を88室設置した。なお、これに自動給、配水施設と暖房機を取りつけて自動化している。

ロ. 根株の冷蔵と施設

1月から2月にかけて掘りあげられた根株は、そのまま全部伏せ込んだのでは、3、4月に収穫して終りになってしまう。しかも生産過剰から市場取り引きも不利なので、掘りあげた根株のうち約50%は冷蔵庫に保管貯蔵する。この冷蔵庫も昭和45年に220m²の施設を完備した。

冷蔵の温度は0度C、湿度は100%で保管し、

5月上旬以降9月末まで、5日おきに同量ずつ、30回にわたって順次出庫し、夏ウドとして計画的に生産出荷している。

収益性と今後の問題

ウドの生産地が都市周辺に多いことは先に述べたが、収益性をみると、3表のとおりである。この収益を見たかぎりでは都市近郊では成立しないように思えるが、注目したいのは時間当りの労働報酬である。1時間当り852円

はかなり高い金額であり、しかも周年出荷できることが、都市近郊で成立している要因と思う。

今後の問題として考えられることは、根株をどのようにして生産して行くかであるが、これは都

第3表 ウドの収益性 (昭48.10a 当り)

収 入	項 目	金 額
	取 量	1,400kg
平 均 単 価	平均単価	135円
	売上上げ金額	189,000円
生 産 費	肥料費	8,500円
	農薬費	6,000円
	種苗費	40,000円
	種数	10,800円
	出荷箱費	12,500円
	農機具費	7,000円
	雑費	2,000円
小 計	86,800円	
収 益	取 益	102,200円
	労働時間	120時間
	1時間当り労働報酬	852円

市近郊に多い不耕作地を借り受けて大規模経営をすることと、高冷地への委託養成による分業化の方向である。この結びつきができれば、ウド栽培はますます発展し、安定化すると思う。